

思
考
の
境
景

連載②
芸術における二十世紀モダニズム・パラダイム成立とその商業的背景

稲賀繁美
国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学助教

ポスト・モダンの狂騒も終焉した今、二十世紀モダニズムの基礎を洗いなおす地道な作業が、再びその真価を問われている。芸術におけるモダニズム・イデオロギーの教条として、国家管理のサロン（いわゆる官展）の崩壊にともなう、藝術の自由市場の成立が言及された。社会学者 Pierre Bourdieu の『芸術の規則』（石井洋二郎訳、藤原書店）も、藝術の自律——あるいはその幻想 Illusio——を軸に、藝術革命と、それを可能にした新たな象徴価値市場の関係を検討している。その背景には、ブルデューとは敵対する美術史家 Pierre Vaisse の国家博士論文『第三共和制と藝術家たち』（1980審査通過）あるいは、Harrison / Cynthia White 夫妻による先駆的な『画布と履歴——フランス絵画界の制度的変貌』（1965）、また英米圏からの貢献としては、Patricia Mainardi 『第二帝政の藝術と政治』（1987）、『サロンの終焉』（1993）のほかが掲げられる（評者としては、マイナルティの本はやや粗雑な概論とだけ）。

ここで取り上げたいのは Robert Jensen, *Marketing Modernism in Fin-de-siècle Europe* (Princeton U.P., 1994)。十九世紀末の公式サロンの終焉の背景には、藝術を愛好する公衆の拡大と、藝術家を自称する集団の人口増加とがあり、そこに国家管理から離れた、画商—批評家システムが発展し、画家と顧客を直接媒介するようになる。これはすでにホワイトの打ち出した仮説だが、印象派の擁護者として知られる画商デュラン＝リュエルも、実際にはゲーベル商会（ファン・ゴッホの弟テオドールが、苦勞しながら勤めていた）と器用に「棲み分け」を演じながら、主に中道派の画家たちを扱っていた。ここに市場の現実とモダニズム・イデオロギーとの淫靡な関係が見え隠れする。つまり、この時代の藝術家たちは、実際には新たな市場原理のお陰で自分たちの作品が必需品となった、という商業状況に依存しているながら、建前ではそうした市場に対して——いわば修辭的に——反対を唱え、自分たちの独自性を言い立てることで、その市場における自分たちの売り込みに、これ動機づけていたからだ。その受け皿となったのが「分離派」で、世紀末ウィーンの場合が有名だが、ジェンセンはその嚆矢を、1890年にブラ

ンスで成立した「国民藝術家協会」に認める。日本では「二科」、「三科」や「国画創作協会」がこれに相当しよう。これが一見より「民主的」な展覧会が成立したかに見えるが、実際には、かつて画家たちが入選の栄誉を目指していた、かの官展の特権も振り崩される結果となった。となると今度は、この市場で頭角を現す必要が生まれる。こうして、印象主義が市場価値を確立した二十世紀の初頭——すなわちモダニズム成立期——には、いわば皮肉な必然として、次の世紀——所謂後期印象派——が印象派の後継者たちを否定し始める。

ジェンセンはこのダイナミズムを、国際的な視野で分析する。例えば80年代以降のホイスラーは、英国でフランスの影響下に成立した自由市場——グロヴナー画廊——に巧みに売り込みながら、「十時講演」などの美学宣伝活動では、超然たる唯美主義の反商業主義を演じてみせた。仏・独間の相互依存関係も見逃せない。藝術的には一方的なフランスからドイツへの輸入超過現象だった「モダニズム」は、『現代絵画発展史』（1904）を著した批評家 Julius Meier-Graefe や、ベルリン国立画廊にマネの『温室にて』を始めとして「フランス印象派」を積極的に購入した館長 Hugo von Tschudler の、積極的な「偏見」ゆえに、まずドイツ語圏で市民権を獲得した。その余波が Roger Fry らロンドンのブルムズベリー・グループに飛び火して Post-impressionism 概念が浮上し（1910）、フライと対立した Herbert Read らを含めた動向が、今度は大西洋を渡って、ニュー・ヨーク近代美術館初代館長の Alfred Bar Jr. やフォルマリズム美術学の主要なイデオログとなった Clement Greenberg、さらにはコロンビア大学の Meyer Shapiro といった面々に波及してゆく。ジェンセンは触れていないが、その水面下には、世紀末以降、メトロポリタン美術館などがマネや印象派を積極的に購入し、作品価格が太平洋を横断する間に桁違いに値上がりした、という事実も潜んでいる。その到達点としての、フォーマリストの旗手 Michael Fried の著作、『マネのモダニズム』（1996）が、そうした自己の存立構造にいか鈍感かは、この著作が出版された直後に、本欄で触れた通り。